小学校指導者用資料

自然学校ガイドブック

～ 自然学校のさらなる充実のために ～

平成30年3月

兵庫県立南但馬自然学校

1 はじめに

兵庫県が「自然学校推進事業」（以後「自然学校」という）をスタートさせて30年が経過しました。この間、各小学校では自然学校を推進していくための様々な取組や知識、手法等が蓄積されてきました。その中で、「自信がつき、たくましくなった」、「自主性、積極性が生まれた」、「自然に興味を持つようになった」、「家庭での役割を進んで果たすようになった」、「友人関係が促進され、周りの人のことを考えるようになった」等、児童に様々な力が身についたという報告がなされています。児童の生きる力を育む上で、自然学校が大きな役割を果たしたと言えるでしょう。

一方で、プログラムや運営面に焦点を合わせてみると、どうしても従来の取組を踏襲することが多くなり、プログラムのねらいや指導方法、指導形態等が画一化・固定化する傾向が見受けられます。児童は毎年替わりますし、その実態も当然変わります。前年までの取組の成果と課題を踏まえながら、今年度の児童の実態に応じたねらいを設定し、プログラムを編成することが何よりも重要なのではないでしょうか。

そこで、本資料では自然学校の充実をめざして、自然学校のプログラム編成（プログラムデザイン）を中心に、自然学校を運営するポイントやＱ＆Ａ等、基本的な手立てをまとめました。自然学校に関わる方々に活用いただき、事業推進の一助となれば幸いです。

2 プログラムデザインとは

プログラムとは、一つ一つの活動を組み合わせ、目的を持った一連の流れをもたせた全体の活動をいいます。自然学校のプログラムデザインは、自然学校の目的（ねらい）を実現するための重要なポイントであり、学校（教職員）の「思い」や、「ねらい」、「テーマ」等を活動という目に見える「動き」、「形」を用いて構成するものです。

プログラムデザインを行う上で、最も大切なことは、子ども達に何を感じて、何を考えてほしいかというテーマであり、子どもの思いや状況に配慮した流れです。効果の高いと思われる活動であっても、単なる羅列では良いプログラム構成とはなりません。ねらいやテーマを踏まえ活動全体を通した一本の軸をもつこと、活動同士につながりをもたせること等が重要です。

【　留意点　】

☆プログラムの「ねらい」を明確にする
☆児童に何を伝えたいのかを整理し、方向性を決め、目的の共有化を図る
☆実施する活動内容とねらいの一致を図る
☆「どんな活動ができるか」ではなく、「何のために行うのか」を意識する
☆欲張らず絞り込む（ゆとりあるプログラム）
☆児童の期待するものをくみ取りプログラムに反映することも大切にする（児童の参画）
☆活動場所の立地条件や自然環境等を調査する
☆児童に効果的な情報を開示する（利用施設の下見時のVTRや写真、６年生の体験談等）

3 プログラムデザインの構図 ～プログラムを作成するまで～

自然学校推進事業実施要項（兵庫県教育委員会）

自然学校の趣旨・目的

学校教育目標
年間指導計画
学年・学級目標

事前調査による実態やニーズの把握

社会・地域・保護者のニーズ → ← **学校（教職員）の思い・ニーズ**

児童の実態・ニーズ → ← **資源**

自然環境･施設･人材･予算等の把握

自然学校後の児童の具体的な姿をイメージすることが大切

ねらいの設定

指導者全員が共通理解するべきもの

施設の下見や施設との事前打合せが必要

ねらいに沿ったプログラムの流れ・実施手順

ねらいを達成するための活動の精選

児童の意見も聞いてみましょう

フィードバック・練り直し

ねらいに沿った活動の組合せ（プログラム作成）

○ねらいを効果的に達成できる活動内容や活動順を意識する
○活動を欲張らず絞り込む（ゆとりあるプログラム）
○活動同士につながりをもたせ、全体の流れを意識する

児童の主体性を育むには、試行錯誤しながら課題解決を図るためのゆとりが必要

活動展開：つかみ（導入）～本体（展開）～振り返り・分かち合い（まとめ）
活動形態：一斉活動・小グループ活動・個人活動・選択活動

活動の目標に適した形態を

児童の意見も聞いてみましょう

作成したプログラムの客観的評価

効果・改善点・疑問点・指導体制　等

実施細案の作成

所要時間
指導者の役割分担
リスク管理
準備物　留意点

ねらいを達成させるための活動中の指導や手立てが大切

児童の安全に配慮することが最優先

4 ねらいに即したプログラム例

自然に親しむ

1日目　自然発見！ウォーク
・五感を使って自然の美しさ、楽しさ、伝統・文化、生物多様性等を学び、豊かな人間性を育む。

星空観察
・美しい星空を見ることで感動し、自然への興味や関心を高める。

2日目　野外炊事
・火おこしから火をつくり、柴や薪等を燃やし炊事することで自然の恵みを感じる。

3日目　早朝朝来山登山、テント泊
・あけぼのと次第に明るくなる山際の美しさに感動し、古典や文化に興味を持つ。
・夜の静けさの中で生き物の声を聞き、多様な生物の存在を実感する。

4日目　自然物クラフト
・自然に入り、自ら材料を採集することによって、自然とのふれあいや自然素材の美しさに感動し、それらをいかして物をつくることの楽しさを味わう。

5日目　森の美術展
・森の中の植物等を使って、テーマに沿った造形物を製作し鑑賞し合うことで自然の美しさを見直す。

信頼関係を深める

1日目　施設散策オリエンテーリング
・仲間と一緒に課題解決することを通して、緊張をほぐし仲間と共に活動していこうとする意欲づけの機会とする。

2日目　野外炊事
・グループで役割分担し、それぞれが責任を果たしながら炊事することで、自己有用感や自己肯定感を高める。

3日目　朝来山登山
・友達と励まし合いながら踏破し喜び合うことで友達との一体感を感じる。

テント泊
・不安なテント泊を友達と一緒に乗り越えることで、友達の大切さを実感する。

4日目　隠れ家づくり
・グループで協力して一つの作品を作り上げることをめあてに心を一つにし、出来上がった達成感を共有する。

5日目　共同製作
・自然素材を使いみんなで工夫して作品に残すことにより、自然学校の思い出づくりと事後の励みへとつなげる。

地域とのふれあい

1日目　自然にふれる（どんぐりコレクションやもみじがり等）

・南但馬自然学校の自然にふれることで、自分の住む地域と南但馬との違いに気付く。

2日目　竹田城下町ウォークラリー・竹田城跡登山

・竹田城下町の町並みを散策し、課題解決しながら竹田の歴史や文化、人にふれる。

3日目　地域探訪

・食材の買い出しのためにマウンテンバイクで地域に出かける。チェックポイントに設定された温泉に入ったり、座禅体験をしたりする等、地域の人との交流を図り、但馬の風土を感じる。

4日目　野外炊事

・買い出しをしてきた地域食材をいかしたメニューで野外炊事を行う。

5日目　選択クラフト

・しめ縄づくりや苔玉づくり等、地域人材を講師として作品づくりすることで但馬や自然への理解をより深める。

自主性を育む

1日目　イニシアティブゲーム

・グループで課題解決に向けて、意見を出し合い、相談する。

キャンプファイヤー

・仲間との絆を深めながら、自然学校への動機付けをする。

2日目　地域探訪

・事前にグループで検討したコースに従って地域探訪を行う。コースの中に次に行う野外炊事の食材を仕入れる店舗を入れておくと活動につながりができる。

3日目　オリジナルメニューによる野外炊事

・自分たちで考えたオリジナルメニューで野外炊事を行う。

・調理に必要な器材の準備から片付けまで責任を持って行う。

4日目　個人選択活動

・自分の興味・関心がある活動を選択することで成就感や達成感を味わう。

・最後にそれぞれどのような活動の成果があったのか、振り返りや分かち合いの時間をもつ。

5日目　班別活動

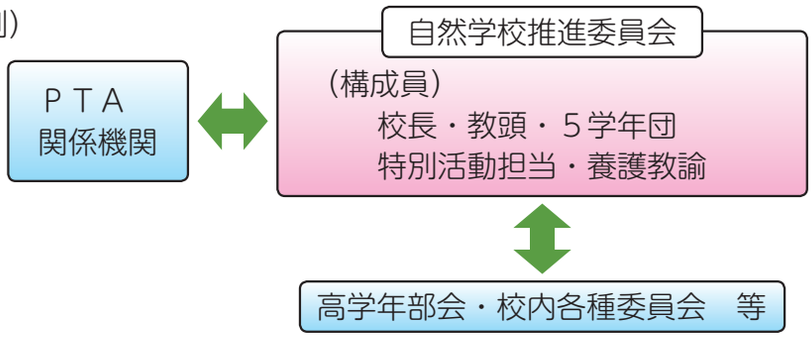
・これまでを振り返りながら、施設の環境をいかした活動内容を考え、自分達ならではの活動を行う。

5 運営のポイント

(1) 学校としての体制づくり

活動の窓口となる担当を明確にし、校長の指導の下に全教職員が協力して校内推進体制を整備します。

（例）



(2) 教職員の意識・能力の向上

教職員一人一人が自然学校の意義や理念を正しく理解し、活動に係る指導の力量を高めていくことが不可欠です。

教職員一人一人が自信を持って指導に当たることができるように、校内の研修はもとより、教育委員会等が実施する研修等に積極的に参加します。

身につけたい知識・スキル（例）

- ○プログラムデザイン（ねらいに即した活動を効果的に構成すること）
- ○リスクマネジメント（起こりうるリスクを事前に回避する方策や、事故に対処するための具体的方法）
- ○体験学習法（共に体験した人と気付きを分かち合い、相互理解から学びを深め、次の行動へといかしていく構造化された教育手法）
- ○応急処置（心肺蘇生法、出血や骨折等の手当の手法）
- ○自然体験活動（活動の楽しさを体感するとともに、自然体験に関する知識やスキルを身に付ける）

(3) 活動実施上の配慮

◇教育活動全体を通じた自然学校の充実

発達段階に応じた適切な活動の機会の提供が行われるよう、自校の教育目標や地域の実情を踏まえ、学校として活動のねらいを明確にします。

◇興味・関心を引き出し、自発性を高める工夫

発達段階や活動の内容に応じ、活動の企画段階から児童を参画させるとともに、児童が選択できるよう多様な活動を用意することが望まれます。

多様な活動の例

- ○体力に応じてコースを選択する登山
- ○散策ポイントを選択する地域散策ウォークラリー
- ○野外炊事における班別のメニュー設定
- ○各児童が興味に応じて苔玉づくりや焼き板づくり等を選択する製作活動

◇事前指導・事後指導

活動前に、自然学校を行うねらいや意義を児童に十分理解させ、児童がこれから取り組む活動についてあらかじめ調べたり、準備をしたりすることを通じ、意欲や見通しを持って活動できるようにします。

活動後は、感じたことや気付いたことを振り返り、自然学校新聞にまとめて表す等、言語活動を充実させるとともに、感動体験を様々な表現方法で他者に分かりやすく伝える等、自然学校での学びを集団で深め、定着を図るための学習活動が大切です。

事前指導の例

○事前アンケートによる児童の願いやニーズ等の調査
○実行委員による話合い活動
○自然学校出前講座の活用

事後指導の例

○自然学校新聞づくり
○自然学校報告会
○キャリアノート等を活用した自己評価

◇活動の円滑な実施のための配慮

受入れ先との綿密な連絡調整等、企画段階での配慮や活動を実施する際の留意点等についての十分な調整をします。そして、児童への周知、活動を支援する指導補助員や帯同救急員等との十分な打合せ、活動を振り返り次の活動につなぐ手立ての工夫等が重要です。

◇活動の適切な評価

自然学校の評価については、どのような資質や能力が育っているのかという観点を重視して、児童が努力した点や成長した面等を積極的に評価する必要があります。

そのためには、振り返りが重要で、児童の感想・意見だけでなく、保護者の感想・意見、受入れ先の感想・意見等を把握する等、適切な評価を行うための工夫をします。

また、その結果を次年度以降のプログラムの内容や活動の在り方に反映させます。

◇事故発生時の備え（リスクマネジメント）

緊急時対応マニュアルを作成するとともに、必要に応じて地域の警察署や消防署、医療機関等への事前連絡、緊急時の連絡先リストの作成等の準備を行うことが必要です。

事故発生に繋がるリスク要因

○人的要因（人そのものに関わること）
・体力　・筋力　・疲労　・集中力　・意欲　・意識　等
○外的要因（人を取り巻く環境）
・天候　・フィールド　・道具　・施設　・動植物　等

Q＆A

プログラム作成のポイント

Q　体験的な活動を一層重視することが重要となっていますが、どのような点から自然学校を見つめ直し、充実させることが大切でしょうか？

A　自然学校評価検証委員会の「６つの方策」をもとに、自校の活動を点検してみましょう。
＜方策１＞　自然学校と他の教育活動との関連が図られているか
＜方策２＞　事前・事後の学習活動をしっかり行えているか
＜方策３＞　学校では得難い体験活動プログラムを取り入れているか
＜方策４＞　社会性や自立性等を育むための活動を取り入れているか
＜方策５＞　子どもの成長過程を踏まえた体験活動となっているか
＜方策６＞　家庭や地域との一層の連携を図る取組を取り入れているか

Q　教室での学習と自然学校の違いはどこにあるのですか？

A　学校とは違った自然体験、社会体験、身体的体験、感性を育む体験等、様々な体験を通して行う教科等の枠を越えた学習活動であり、豊かな人間性や問題解決能力を育成する等、人間教育の場であるということです。ゆとりのある時間の中で、児童が自ら考え、自分がしたい活動に思う存分取り組み、自然の中にゆったりと身を委ねることができます。その中で、教室では得られない気付きや発見があり、満足感や成就感等を味わえるのではないでしょうか。教師自身も新しい発見があるはずです。

Q　プログラムを作成する時のポイントを教えてください。

A　まず、ねらいを明確にすることです。「児童の実態」と「学校・保護者・地域の願い」を踏まえてねらいを設定し、ふさわしい活動を選びます。「児童参画」という視点から、児童の意見も取り入れるように工夫をすると良いでしょう。

	ねらい	活　動　例
例1	自然の中で不便な体験を味わわせることによりたくましさを育てたい	「火おこし体験と野外炊事を複数回」 「電気のない真っ暗な中でのテント泊体験」 「たらいと洗濯板を使った洗濯」
例2	困難なことにもチャレンジし、自分に自信を持たせたい	「朝来山登山」 「一人用テント泊と一人野外炊事」
例3	自然の中で、視覚だけではなく五感を使って生活をし、豊かな人間性を育てたい	「どんぐりコレクション」「もみじがり」 「香りをきく」「草木染め」 「木材くらべ」

次に、ゆとりを持った計画を立てましょう。中心となる活動は、１日につき１つあるいは２つまでにします。ゆったりとした時間の中でこそ、自然に目を向け、色々な体験をすることが可能になります。

また、主体的に取り組ませるために、児童に活動を選ばせたり、１日又は半日を児童が計画した活動を実施したりすることを取り入れてみましょう。ただし、その際のルールづくりや指導者の支援態勢等はしっかり整えておくことが大切です。

Q　プログラムやその準備については誰がどのように決めるのですか？

A　学校によって様々です。担当教員だけでなく、推進委員会を組織する場合もあるでしょう。５年担任だけに任せるのではなく、学校として自然学校を推進する意識と、具体的な体制づくりが重要です。

また、計画段階で児童の意見を反映させる、個人の興味・関心に応じた選択活動を取り入れる等、児童に考えさせ主体性を育てることもできます。

さらに、活動場所の下見や受入れ先の職員と打合せを行い、共通理解を図ることが必要です。

Q　児童の参画を促すためのポイントを教えてください。

A　次のようなポイントを挙げておきますので、検討してみてください。

①　フィールド、自然環境等の情報提供
実施場所の自然環境、活動資源等の情報を児童に提供し、自然学校への意欲を高めます。

②　選択型の活動の設定
児童の興味・関心を重視し、児童が取り組みたい活動や選択活動を設定します。

③　ゆとりあるプログラム
児童の発想を取り入れ、活動にじっくりと取り組み、柔軟性や深まりのある活動を大切にします。

④　集団活動を高める取組
児童が生活ルールやグループ編成を考える等、自主的・実践的な活動を大切にします。

Q　ねらいに即した活動を教えてください。

A　ねらいに含まれている基本的な要素と活動例をいくつか挙げますので、参考にしてください。

ね　ら　い	要　素	活　動　例
協調性を高める	協力、団結、相互理解、共感	野外炊事　隠れ家づくり 漕艇体験　自然発見！ウォーク
信頼関係づくり	共感、思いやり、協力、団結、葛藤	野外炊事　テント泊　隠れ家づくり 木（竹）伐採体験
感性を豊かにする	五感、感受性、表現力、文化、生活	自然観察　自然とのふれあい　草木染め どんぐりコレクション　もみじがり
自信をつける	成就感、達成感、成功体験、自己との対峙	朝来山登山　竹田城跡登山 一人用テント泊　火おこし体験
自己肯定感を育む	充実感、成功体験、共感、自己との対峙	朝来山登山　竹田城跡登山 カウンシルファイヤー　スタンツ発表
コミュニケーション能力を高める	思いやり、相互理解、表現力、聞く力	地域散策ウォークラリー マップづくり　自然発見！ウォーク

学校全体の体制づくり

Q　自然学校を実施するには、学校全体として無理のない協力の仕方を考えていかなければいけないと思いますが、具体的にどのような方法があるのでしょうか？

A　例として、次のような方法を挙げておきますので、検討してみてください。

①　自然学校のプログラムの公募

自然学校の基本方針を示し、全職員にプログラムを考えてもらいます。その中で良いものを採用して実施すると職員の参画意欲が高くなると思われます。

②　プログラム上でメインとなるものへの協力

自然学校のメインの活動が野外炊事であるなら、その日だけ協力を依頼して人員を増やします。メリハリのあるプログラムは自然学校の成果を高めるためにも有効です。

③　自然学校推進委員会の設置

自然学校推進のための委員会を校務分掌上に位置づけ、計画や書類作成等を協力して行います。情報を共有することで自然学校への理解も深まるものと思われます。

④　人に関わる予算の重点的配分

野外活動等の専門的な技術指導員を有効活用する、あるいは、配慮を要する児童の支援や安全管理に必要な人的配置をする等、人件費（技術指導員や指導補助員等への謝金）に予算を多く配分することも有効な方法ではないでしょうか。

要配慮児童への対応

Q　健康面で気になる児童がいるのですが、何か気をつけておくことがありますか？

A　参加者全員に言えることですが、事前指導として、普段から規則正しい生活習慣を身に付けさせるとともに自分自身の健康は自分で守る意識を持たせることが大切です。

緊急な場合を想定して、利用する施設に近い医療機関や消防署を確認しておきましょう。必要に応じて、あらかじめ医療機関等に連絡を入れておくことも大切です。また、保護者や救急員との連携や施設との綿密な事前打合せが必要です。

実施期間中は、指導者間の連携を密にして、言葉がけだけでなく、多くの目で児童の表情や行動等からも健康状態を探るように見守っていきましょう。

Q　参加したくないという児童がいるのですが、どうすれば良いのでしょうか？

A　自然学校は宿泊期間が長いため、不安になる児童がいるのは当然です。しかし、学校行事として大きな意味を持つことや、自由参加ではないことについて理解を求めましょう。

また、児童、保護者の不安をしっかりと受け止め、説明会等で対応するとともに、持ち物の準備、家庭を離れての生活、現地情報の提供等、不安の軽減に向けてサポートしていきましょう。

不登校傾向の児童については、全日程の参加が難しい場合、１日単位や活動ごとで参加する等、部分参加を促してみましょう。自然学校が再登校のきっかけとなった事例が報告されています。

Q　障害のある児童が参加する場合、どのようなことに配慮すべきでしょうか？

A　障害の程度や状況を十分に把握し、可能な限り参加できる状況を整えることが望まれます。
　環境の変化は、児童にとっても職員にとっても課題となる可能性が高いので、バリアフリーや救急の対応等、施設との綿密な事前打合せを行うことが重要です。また、施設の様子や利用上の注意等について、写真や図等を使い、事前に学習しておくと良いでしょう。可能であれば、現地の下見をすることも有効です。
　また、サポート体制を十分に整えることや、関わる教職員、介助員、指導補助員、救急員等がサポートについて共通理解を図ることが不可欠です。配慮の必要な児童それぞれに、活動ごとに想起される支援内容を明らかにし、「いつ」「誰が」「何を」「どのように」行うのかしっかりと役割分担しましょう。想定外の状況にどう対応するかも合わせて検討しておくと安心です。
　寝食をともにする中で交流が図られ、互いに理解し学び合うかけがえのない体験になるよう十分な準備をお願いします。

教師の支援のあり方

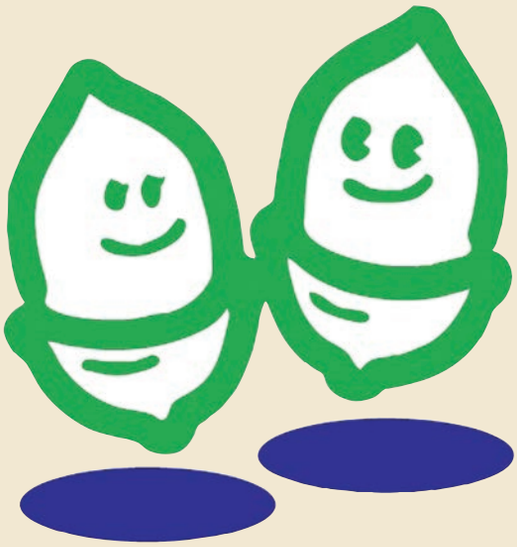
Q　児童が生き生きと活動できるようにするには教師がどのような支援をすれば効果的ですか？

A　しっかりと見守り、必要であれば適切な助言や支援を行います。
　自然学校では「知恵」を磨くことができます。知恵を働かせるために、すぐに解決方法を教えるのではなく、あえて苦労させることも必要です。児童に寄り添い、見守りながら、何につまずき、どのようなことで苦しんでいるのかをしっかりと把握しましょう。
　助言する場合も、１つの答えを与えるのではなく、解決のヒントを与えたり、複数の方法を示し選択させたりするとより意欲的に活動できます。

Q　指導補助員（リーダー）にも関わってもらうのですが、指導補助員に対する事前指導としてどのようなことが必要ですか？

A　指導補助員は、自然学校の効果的な実施を図るため、学校の監督管理のもと教員の補助として、児童の活動や生活に対する指導補助を行うものです。そのため、指導者としての自覚を持たせることが必要です。
　事前打合せや顔合わせ等の際に、自然学校のねらいをしっかりと理解させ、教員と同一歩調で児童に接するように指導します。また、基本事項である「ＴＰＯを考えた服装」、「人権に配慮した言葉遣い」、「体罰の禁止」、「安全に対する配慮（報告・連絡・相談）」、「分け隔てない対応」、「自分自身の体調管理」等を徹底することが大切です。

　なお、詳細については、本校ホームページ（http://www.shizengakko.jp）の「自然学校」の頁にある「評価検証委員会」、「自然学校実践事例集」、「プログラムデザイン」、「原体験から見た活動の分類」、「刊行物」等をご覧いただき、参考にしてください。



自然学校ガイドブック

発行日　平成３０年３月
発　行　兵庫県立南但馬自然学校
兵庫県朝来市山東町迫間字原１８９

Tel　０７９－６７６－４７３０
Fax　０７９－６７６－４００８
E-mail　mtajimashizen@pref.hyogo.lg.jp

29 教①1-024A4